

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580108

研究課題名(和文) 大学英語教育における文学的教材の適格性に関する学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary study on the suitability of literary materials for college ELT

研究代表者

平野 幸彦(Hirano, Yukihiko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20275001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：昨今の大学を始めとする日本の英語教育において、教材や試験問題に文学作品を取り上げることは敬遠される傾向にある。その一方で、教育現場では文学作品を用いることの意義はよく認識されているように思われるが、その実践を積極的に支持するための研究が十分になされているとは言いがたい。そこで本研究では文学作品の原作とその再話版とを比較分析することにより、文学テキスト固有の特性を記述し、その知見を活かした教材制作の指針を具体的な形で提示することを目標とした。その成果は、当初の目論見を十分に達成するには至らなかったものの、一定の結果は残すことができ、今後の研究を展開するための基盤をなすものとなったと考える。

研究成果の概要(英文)：In recent English language education in Japan, notably at the tertiary level, there has been an inclination to avoid the use of literature as a resource for the creation of teaching material and tests. However, teachers indeed seem to recognize the significance of exploiting literary works in classrooms. In the absence of sufficient research to support their intuitive insight, our research aimed first to describe unique properties of literary text by comparing original works with their retold versions, and then to present specific guidelines for producing teaching material based on the findings. Overall, our goal was achieved to the extent that the outcomes would provide the foundation for further research.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：英語教育 大学教育 英語リーディング 文学的リテラシー

1. 研究開始当初の背景

(1)大学(特に教養教育レベル)を始めとする我が国の英語教育は過去数十年来、いわゆる“コミュニケーション”に役立つ英語運用能力の養成を求める世論や、国の人材育成政策の影響を受けて大きく変容してきた。そしてその過程と並行して、高校までの教科書やとりわけ大学入試問題から文学作品が排除される傾向が高くなってきたことは周知の事実である。もっとも英語教育の中で文学作品を教材に取り上げることのメリットや重要性は少なくとも現場の教員の間ではよく認識されており、その流れの中で、出現する語彙や文法事項を制限したリトールド(再話)版、すなわちグレーディッド・リーダーズを多読させるリーディング指導法において、とりわけ文学作品のそれが内容的に生徒・学生の興味や関心を強く惹きつけるためにインプット量の増大や学習意欲の向上に資するということが主張されてきた。しかしながらたしかにその効果は経験的に確認されているものの、実践の裏付けに関わる問題、例えば“いかなる種類の文学テキストであっても、またいかなるレベルのリトールド版であっても、文学的教材ならではの効果を発揮できるのか”といった問題については十分な実証的研究がなされているとはいえない状況にあった。

(2)以上のような背景を踏まえ、本研究プロジェクトは、文学を専門として英語教育に携わる大学教員はもとより、少なからぬ数が大学時代に文学を専攻し学位を取得した中学・高校教諭による英語科の授業の実践において、彼らの専門性をより自信をもって積極的に反映させる後押しとなるべく構想されたものである。

(3)またこの種の研究は従来、もっぱら文学および第二言語習得研究のそれぞれの枠内において行われてきた。それでも一定の成果を上げてきたわけだが、個々の分野の内部にとどまっているかぎり、ある種の限界に突き当たってしまうことも否定できない。つまり他領域における研究成果の蓄積を十分に活用することができないのである。本プロジェクトが学際的な組織を構成することにより、質的なブレークスルーを達成しようと企図した所以はここにある。

2. 研究の目的

(1)本研究は“外国語(英語)教育と文学教育のインターフェースの探究”という全体構想の中に位置づけられている。その中で本研究の具体的な目的は、英語を外国語として学習する日本人を対象とした大学学士課程レベルの英語リーディング指導の中で文学作品を教材として用いる有効な方法を開発するために、オーセンティックな(原作)文学テキストとそのリトールド版とを比較分

析することにより文学テキスト固有の特性を記述し、それを活かした教材制作の指針を具体的な形で提示することにあった。そうすることにより、従来もっぱら経験に基づく印象的なエビデンスに頼りがちだった英語教育における文学的教材採用の意義を理論的かつ実証的に検証する試みの嚆矢となることを目指した。

(2)本研究が当初目指したところは概ね次の3点にまとめられる。

オーセンティックな文学テキストは、平易な英語を用い、かつオリジナルに比べ短い分量に書き直されたリトールド版に対してどのような特性を持つのかを、文学研究および言語学的視点から実証的に明らかにする。

で明らかになったオーセンティックな文学テキストの特性を活かした英語リーディング教材を第二言語習得研究の立場から同定(存在しない場合は開発)し、それを用いたシラバスを作成する。

で作成したシラバスを用いた試行授業を実施し、学習効果を量的および質的研究により検証することで、その有効性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)本プロジェクトは当初、次のような流れによる研究を3か年計画で遂行する予定であった。すなわち、まず研究代表者および分担者がこれまでも行ってきた資料収集や出張調査、先行研究の分析をさらに進めることにより当該研究分野の最前線を再確認する一方、オーセンティックな文学テキストとリトールド版とを文学、言語学、第二言語習得研究の観点から比較して文学テキストの特性を同定する。次に、その特性を活かした教材を用いたシラバスを第二言語習得研究の知見を活かして作成し、それを用いた試行授業を行う。その後、学習効果を量的・質的評価により検証することによって当該シラバスの有効性を確認し、本プロジェクトの次のステップへとつなげるという流れである。

(2)ところが不慮の事故や不測の事態のため研究の遂行に遅滞が生じ、当初の3か年計画を4年に延長することを余儀なくされた。これは研究内容の本質に関わる支障でなかったとはいえ、遺憾であった。

(3)また1.(1)で述べたように、文学テキストの英語教材としての有効性はこれまでも程度の差はあれ認識されてきたところだが、それはもっぱら教室での教える側の感触や生徒や学生の感想に基づく傾向があった。そのため英語教員が文学テキストを教材として使用すべく、その意義を外部に対して訴えようとしても客観的な根拠をもって主張できない憾みがあった。そこで本研究プロジェ

クトでは、この悩ましい状況を打破するために次の4つのリサーチ・クエスチョンを設定し、文学/言語学/第二言語習得研究から成る学際的見地からの検証を目指すことにした。

オーセンティックな文学テキストは、リトールド版と比較して、いかなる特性(語彙、文体、構成など)を持つのか?

オーセンティックな文学テキストの特性を活かした英語リーディング教材(リトールド版を含む)とはいかなるものか?

上記の文学的的特性を活かした英語リーディング指導を日本の大学で実施するためには、どのようなシラバス(授業目的、到達目標、具体的な教授法、教材、授業計画、成績評価を含む)がふさわしいか?

上記シラバスに基づく授業によって、学生は何を、どのように、どの程度、内在化するに至ったか(あるいは至らなかったか)?

及び については主に文学および言語学に関する理論をバックボーンにしたテキストの実証的研究を行い、及び については主に第二言語習得研究の知見を活かした授業設計および事後評価を行うものとする。これにより日本の大学におけるケーススタディとして、オーセンティックな文学テキストの特性を活かした教材を用いたシラバスに基づく英語教育の有効性が実証的に検証されるはずだと考えた。

4. 研究成果

(1)文学/言語学/第二言語習得研究いずれの分野における研究にも共通して言えることとして、本研究プロジェクトに関わりのある図書や論文を収集する一方、国内で開催された関係学会に出席し、研究動向の最新線を探るべく努めた。

(2)文学的立場からの研究においては、とりわけ3.(3)で述べたリサーチ・クエスチョンの検証に力を注いだ。例えば に対しては、リトールド版は現代の英語学習者を対象として標準的な現代英語を用いて書き換えられていると簡単に大括りすることはできず、標準的な現代英語といってもアメリカ英語を用いて書かれているもの、イギリス英語を用いて書かれているもののそれぞれが存在する。その双方を教材として比較検討することにより初めてそれぞれの特性を知ることができ、その知見を授業実践で活用できることが判明した。 に関しては、オーセンティックな文学テキストの難解さを回避し、物語全体のプロットを比較的容易に把握するためにはリトールド版は優れてはいるが、文学作品としての価値はむしろその回避された難解な部分に含まれていることが多々ある点をオリジナルのテキストとリトールド版を併用することにより、具体的に例示できる。

従って に対しては、上記 、 の特性を踏まえたシラバスを予め示した上で授業に臨むことが肝要であると結論づけた。そして については、学生はアメリカ版、イギリス版、それぞれのリトールド版を比較検討することにより、アメリカ英語、イギリス英語それぞれの綴り、語彙、句読点等の違いに気づくことができた。またオリジナルテキスト、リトールド版の併用により、全体のプロットを比較的容易に把握しつつ、文学作品としての価値の所在を探る方向へと一段階上の学習段階に進むことができた(上記成果を含む報告は5.[雑誌論文] にまとめられている)。

(3)言語学的立場からの研究においては、文頭文末に生起する非義務的表現の意味的機能的特性を実証的に研究し、その生起条件を理論的枠組みの中で解明することを目指した。具体的には、文頭文末に現れる述語表現に着目し、まず、主節主語を意味上の主語とする述語表現(いわゆる、分詞構文)の他に、主節全体を意味上の主語とする述語表現が実際に存在することを証明し、後者の述語構文の意味的機能的特性を明らかにした。さらに、文頭文末に生起する副詞的不定詞表現の意味上の主語が、主節主語になる場合と主節全体になる場合があることを確認し、文頭文末に生起する2種類の述語表現と、文頭文末に生起する副詞的不定詞表現の意味上の主語を決定する共通のメカニズムがある可能性を示した。さらに、後者の述語表現の意味的機能的特性が、価値判断表明副詞および主節全体を先行詞とする非制限的關係代名詞節の意味的機能的特性と酷似していることに着目し、これらの副詞・関係節を主節全体の同位要素として仮定する Nakajima (1982)の分析を援用することによって、意味上の主語の決定が、相互C統御関係で捉えられるとした Williams (1980)の標準的理論的枠組みのもとで、適切に説明できることを明らかにした。

(4)第二言語習得研究の立場からの研究においては、平成23(2011)年度から28(2016)年度にわたる新潟大学全学英語教育カリキュラムの成果検証を試みた。使用したデータは、TOEIC IP スコア、e-learning による課外学習時間、学生によるアンケート、教員による成績評価およびクラス・サイズであった。TOEIC IP スコアおよび e-learning による課外学習時間からは、本カリキュラムによる一定の教育効果が認められた。その一方で、学生による授業評価からは、他の科目と比較してリーディング科目に対する学生の満足度や達成感が概して低いことが明らかになった。本科学研究費助成事業の研究では文学教材を使用し共創的な演習形態をとったリーディング科目に対する学生の満足度が高かった(市橋・岡村・平野 [2018])ことから、全学英語のリーディング科目における問題

の所在は主に訳読に終始しがちなこと、およびリーディングの素材に魅力が欠けることにあるとする仮説をたて、その改善に向けた試行と検証への本研究の活用が期待される。

(5)反省と課題：せっかく異なる専門分野の研究者を研究組織に擁しているながら各人の研究成果の連携と総合がもうひとつ上手くいかなかった。これはもっぱら研究代表者の不徳の致すところである。また上記研究の目的/方法と研究の成果を照合すればわかるように、必ずしも所期の目標を達成できなかった事項もある。とはいえ総じて言えば、本プロジェクトは今後の英語を始めとする外国語教育における文学的教材をめぐる研究の発展の基盤を担うものになったと自己評価している。

<引用文献>

Nakajima, Heizo, The V⁴ System and Bounding Category, *Linguistic Analysis*, Vol.9, 1982, pp.341-378

Williams, Edwin, Predication, *Linguistic Inquiry*, Vol.11, 1980, pp.203-238

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

岡村 仁一, Herman Melville の“ The Happy Failure ”と“ The Fiddler ”について、新潟大学教育学部研究紀要、査読無、Vol.8, No.2, 2016, pp.143-150
<http://hdl.handle.net/10191/39637>

加藤 茂夫、岡村 仁一 他、小学校外国語活動テキスト『Hi, friends!』デジタル教材の評価 英語科関連諸領域からの多角的考察、新潟大学教育学部研究紀要、査読無、Vol.9, No.1, 2016, pp.43-64
<http://hdl.handle.net/10191/44715>

岡村 仁一、加藤 茂夫 他、教員養成学部の英語教育専修における英語コミュニケーション科目のあり方について、新潟大学教育学部研究紀要、査読無、Vol.9, No.2, 2017, pp.217-237
<http://hdl.handle.net/10191/47093>

八ドリー 浩美、新潟大学全学英語教育カリキュラム改定の成果検証、新潟大学高等教育研究、査読有、4巻、2017, pp.1-9
<http://hdl.handle.net/10191/49497>

市橋 孝道、岡村 仁一、平野 幸彦、大学英語教育における文学的教材の活用について、人文科学研究(新潟大学人文学部)、査読無、142輯、2018, pp.85-96

八ドリー 浩美、新潟大学全学英語教育カリキュラム改定の成果検証(2)、新潟大学言

語文化研究、査読無、22号、2018, pp.25-32
<http://hdl.handle.net/10191/49712>

〔学会発表〕(計2件)

秋 孝道、一ノ渡 雄貴、主節部を意味上の主語とする英語述語表現について、新潟大学言語研究会、2016

グレゴリー・ハドリー、八ドリー 浩美、Linking Student Constructs to Educational Innovations: International Dynamics within a Japanese Context、European Personal Construct Association Conference, 2016

〔図書〕(計2件)

秋 孝道、一ノ渡 雄貴、研究社、言語学の現在を知る26考、2016, pp.13-22

秋 孝道、一ノ渡 雄貴、開拓社、<不思議>に満ちた言葉の世界(下)、2017, pp.290-294

6. 研究組織

(1)研究代表者

平野 幸彦(HIRANO, Yukihiro)

新潟大学・教育研究院人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20275001

(2)研究分担者

岡村 仁一(OKAMURA, Jinichi)

新潟大学・教育研究院人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20300080

秋 孝道(AKI, Takamichi)

新潟大学・教育研究院人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：60192895

八ドリー 浩美(HADLEY, Hiromi)

新潟大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：60534732

市橋 孝道(ICHIHASHI, Takamichi)

新潟大学・教育研究院人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：70613397